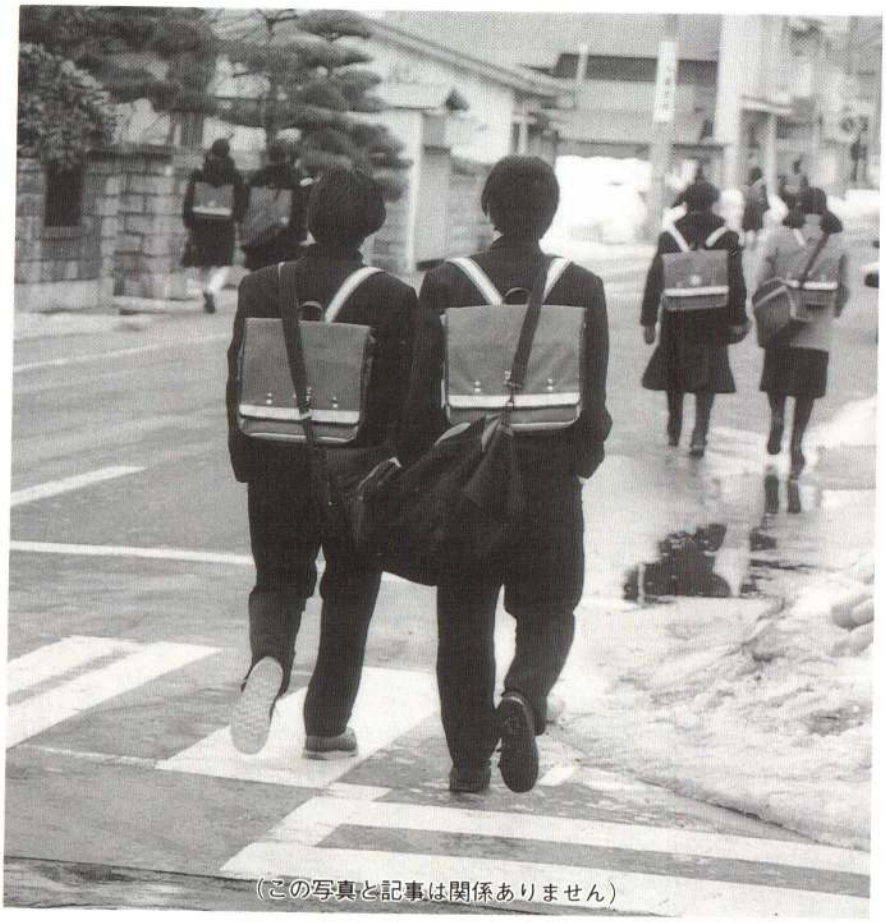
えて、思春期の感情の多感、不安定と相まって失敗の道に入っていくことになるようです。

一度失敗すると、豊かさの中で育っただけに、ハングリー精神が欠けている今の子供たちには、立ち直りが難しいようです。義務教育の中では、中学一年生のときが最も大切と思われますが、どうしても進学を控える三年生に目が向けられ、影が薄くなります。文部省は、中高一貫教育と議論していますが、むしろ小学校から中学教育にスムーズな移行を図ることが問題行動の発生を減らす道とも思われます。

今後、小、中学校両方の教員資格を持った若手職員を育て、小、中学校の密な人事交流を行いたいと思います。そうすれば、良い架け橋となり、早期に挫折している子供の発見、指導ができるものと思われます。


（この写真と記事は関係ありません）

父兄、そして地域社会に対する要望は・・・

最近は、子供を通しての父親像がまったく見えてきません。子供たちの心の中から父権が喪失しているともいえる状況では、家庭のしつけはいかがなものでしょうか。もし、問題が生じても、学校での相談も母親任せ、従って、今の子供たちは「怖さ」を知りません。父親たちの教育に対する参加が強く望まれます。

子供は地域社会の中で育つものです。地域の活動には、親子で積極的に参加することで、親は、豊富な情報を得ることができます。そして、子供は親と一緒に汗を流して行事を完結することによって、強い親子のきずなが生まれます。また、仲間たちとの協調性も形成されます。親の引っ込み思案は、子供には大きな不幸となることを認識してもらいたいと思います。

インタビューを終えて

成田先生は、小学校に十六年、中学校に十一年、行政に六年間在籍した幅広い体験をお持ちです。その体験を通しての子供を見た目、子供たちが育つための親の地域社会との関わりの大切さ、また、行政に対する要望など、貴重なお話をいただき、感謝申し上げます。

先日、「児童思春期の問題行動について」という講演を聴く機会がありました。問題行動の原因は、本人の性格、学校、社会、そして家庭問題と複雑です。特に家庭問題（両親の不和、虐待、アルコール依存、嫁しゅうとめの不仲など）の場合は、その問題ある家庭環境を生き残るため、子供たちは、多様な形で役割を担っているとのことでした。すなわち、両親の仲を取り持つ「なだめ役」、非行などをして家庭の問題を子供の問題にすり替える「犠牲者」、家庭で面白く振る舞って、家族のもめごとや親の悲しみを和らげる「道化者」、高成績やスポーツ万能となることで家族のもめごとの消失を図ろうとする「家族の英雄」、自分の存在を目立たぬようにして家族の注意を引き付ける「閉じこもり型」などです。言葉での表現が未成熟な子供たちは、行動で精一杯シグナルを送っていることに気付くべきであるとの内容でした。大人の世界をじっと見つめている子供たちの目に恐ろしさを感じるとともに、申し訳ない感じがしました。